

視覚特別支援学校におけるキャリア教育

ー職業・職場体験実習等を通じたコミュニケーション能力の向上を目指してー

専門職学位課程

心の教育実践コース

P10048F

川井田 洋一

1 問題意識

研究対象校卒業生には最近、人間関係、自分の思いを上手く伝えられないためのトラブルや、コミュニケーション能力が原因と考えられる離職が出始めている。学校から社会へのスムーズな移行を目指し、職場体験実習やソーシャルスキル・トレーニング（以下 SST と略記する）を実施する意味を共有し、その成果を客観的に評価するためにも、「職業」の時間における SST の実施や職場体験実習等を通じた「コミュニケーション能力の向上を目指した」実践を行いたいと考えた。

そこで研究校においてもキャリア教育の必要性を強く感じ、キャリア教育を教科「職業」や「総合的な学習の時間」、「自立活動」のカリキュラムの一部として位置付け、コミュニケーション能力の育成はできないかと考えた。

2 実践の内容

本研究では重複生徒の授業に教科「職業」の時間を設けた。「職業」の時間を1、3年生は週4時間、2年生は週7時間設定し、単一障害クラスにも週1時間の「職業」の授業を組み込んだ。

「職業」の時間は主に、①月一回の学校周辺を中心とした奉仕活動としてのゴミ拾い、②地域の方との協働作業として公園清掃、③共同での作業における個の能力の向上を目指した作業学習、④自己理解、他者理解を目的とするソーシャルスキルを取り入れ、コミュニケーション能

力の向上を目指した。①②④に関しては職業の時間1時間を利用して単一・重複障害生徒全員で、③に関しては3～5時間を重複障害生徒のみに実施した。また、従来より行ってきた職場体験実習もキャリア教育の一部として継続した。

「職業」の時間に、コミュニケーション能力の向上を目標にした SST（あいさつについて、私の好きなこと等）及び構成的グループ・エンカウンターを実施した。

職場体験実習の意識付けとして、実習前は「何故働くのか」、実習後は「どんな仕事があるか」について KJ 法を用いて意識付け及び振り返りを実施した。

実践の目的としては、

①教科「職業」の時間や職場体験実習を通して、コミュニケーション能力（特に、挨拶と言葉づかい）の大切さを認識し、今までよりもスムーズな人間関係の向上を目指す。

②職場体験実習を通して、自分が出来ることと難しいことを実感させ、自己理解の促進を図る。

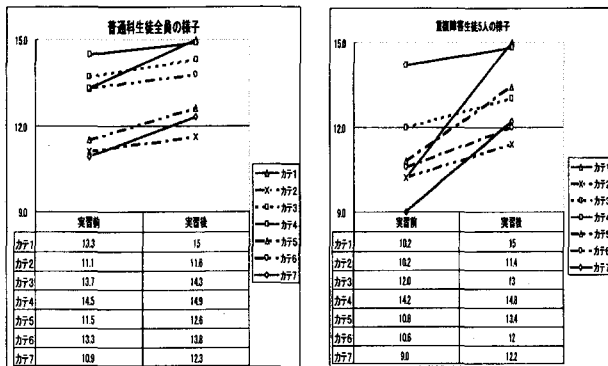
3 観察の手続き

実習前後の「行動観察Ⅰ」は「担任教師による挨拶の観察評価」（実習前が2011年5月30日～6月3日及び実習後が7月11日～7月15日のそれぞれ5日間の朝と帰りの SHR での挨拶の様子）、「行動観察Ⅱ」は「職業の時間における SST を通じた行動観察」（6月5日、12日及び

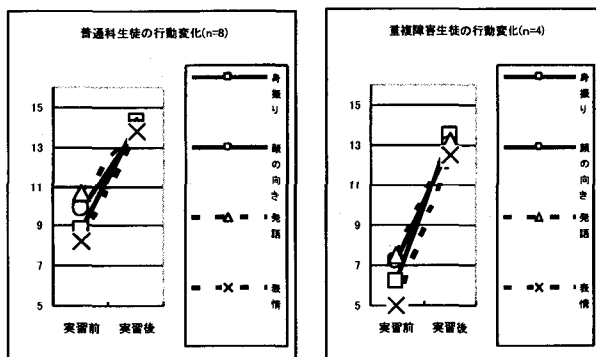
10月)、「行動観察Ⅲ(実習ノートの分析を含む)」は「実習を通じた振り返り」(実習終了後の実習ノート及び礼状に見る表記分析及び日常の観察)による行動観察である。

4 結果

行動観察Ⅰ



行動観察Ⅱ



結果として $p < .01$ となり 1%水準で実習後の方が挨拶はよくなったものと考えられる。また、普通科全員の結果も $p < .05$ となり、5%水準で有意差が見られた。他にも、普通科生徒全員の帰りの声の大きさ ($t(13) = 2.447, p < .05$) と重複障害生徒5人の場に応じた言葉遣い ($t(4) = 2.997, p < .05$) においても、それなりの効果があった。重複障害生徒について実習前後で身振り等各行動変化について、対応のある t 検定を行ったところ、すべて有意差が認められた(身振り: $t(3) = 4.59, p < .05$; 顔の向き: $t(3) = 4.38, p < .05$; 発語・発話: $t(3) = 3.94, p < .05$; 表情: $t(3) = 4.50, p < .05$)。

5 考察・課題等

本研究の目的だった、「教科『職業』の時間や職場体験実習を通して、コミュニケーション能力(特に、挨拶と言葉づかい)の大切さを認識し、今までよりもスムーズな人間関係の向上を目指す」に関しては、図からも効果があったものと思われる。特に重複障害生徒の場合は顕著であった。また、授業で実践したことを体験実習でも試みようとしたものと思われる内容、「朝の挨拶と帰りのあいさつをきちんとすることができた。誰とでもコミュニケーションをスムーズにとれる人間になりたいと思う。」など、生徒の実習ノートの記述を見ることができた。

言葉づかいに関しては、まだまだ課題が残る。親しみを感じて、場をわ決まることなく、ため口になることが多かったので、全教育活動を通じて、小中高等部連携の下、学校の課題として取り組んでいく必要がある。

実践を行って、視覚特別支援学校でのキャリア教育についての提言は、以下の3つである。

- ① 幼児児童生徒の障害の重度・重複化、多様化に対応し適切かつ効果的な指導を進めていくためには、SST、構成的グループ・エンカウンターや職場体験実習等を教育課程の中に組み込んでいく必要がある。
- ② 本研究のように、「職業」の時間における挨拶を主とするコミュニケーションスキルや職場体験実習を通じた挨拶を意識した目標を立てて実践していくことが必要であろう。
- ③ 視覚特別支援学校の場合、自立活動の取組みとタイアップし、キャリア教育を考えていくことも意味を持つものと思われる。

修学指導教員 新井 肇

指導教員 古川 雅文